ふくいミュージアム

1985. 7.1
No. 8

福井県立博物館

田の神祭の神輿　P 5 参照

県博１年の活動を顧みて

学芸課長　青木豊昭

昨春、置県百年を記念し、ふるさと福井の過去を顧み、現在および将来の福井を考えていただこうとする場として創出された県立博物館は、お陰様で１年間で当初予想の５万人を上回り、９万人余の入館者を迎えることができました。

これは、博物館が交通の利便な、緑に囲まれた静かな良い環境にあることや県民のみなさんが福井の歴史や文化に深い関心を持っておられることを如実に物語っているのでしょう。

ところで、博物館の活動というと、多くの方々は、常設展示と特別展示が全てと考えられていますが、その他に、調査研究・資料の収集、保管・教育普及の三つの大きな活動があります。ここでは、それら四つの活動をふり返って見たいと思います。

常設展示は、福井の先人達の歩みとくらしが一応理解できるよう構成されています。ここでは、展示のマンネリ化を避けるため資料の一部展示替えを２回実施しました。特別展は、日頃あまり見ることのできない国宝・重要文化財等を集めた「福井の文化財展」を実施し、約１万６千人の方々に見ていただきました。

調査研究は、博物館を支える一番重要な活動と考えています。数ヶ年にわたる継続研究ですが、分野毎にユニークなテーマで頑張っています。自然は、地質重点地域調査で勝山市の中生代層と取り組んでいます。考古は、「越前の窯業遺跡の分布調査」、歴史は、「北陸街道と宿駅」、民俗は、「越前の川と湖の漁と漁具」、美工は、「奥越における仏教彫刻の基礎的研究」となっています。それぞれの分野で新発見があり、今後の成果が楽しみです。

なお、県内研究者の共同研究・情報交換・後進の育成を目的とした福井考古学会の事務局も博物館に置かれています。近く、福井民俗の会や福井県地学会の事務局も設置される予定です。県内の学問水準の向上と後進の育成の上で大きな役割を果たすものと期待されています。

資料の収集、保管については、当初ゼロから出発して現在約４万点の資料を収蔵しています。寄贈・寄託・購入によるものがほとんどです。昨年の主な物は考古学界の長老斎藤優先生の考古収集コレクションが一括寄贈されたことです。その他、越前出目家の能面など少なくありません。また、収蔵資料で一部破損しているものについては補修をしました。北前船模型や丸岡町椀貸山２号墳出土の優れた須恵器、敦賀市長谷出土の長文の銘を持つ鎌倉時代の骨壺など。これらは、寄贈者からも大変よろこばれました。各種収蔵資料や常設展示室全体のくん蒸（殺菌・殺虫）を実施し、資料の保全には万全を期しました。24時間空調で資料を適温・適湿で保管していることはいうまでもありません。館蔵資料の借用、写真撮影、実測などの申請も数多くありましたが、ほとんど申請者の希望に沿うかたちで対処しました。

教育普及活動は、講演会・学習会・見学会・映画会と多彩な内容で対処しました。中でも、しめ縄づくりや拓本教室はアンコールに応えて２回実施しました。他の機関の主催する講演会・学習会にも講師として数多くの依頼があり、学芸員を派遣して対処しました。その他、市町村区誌(史)の編纂にも積極的に協力するなど、博物館内だけでなく、地域社会の中に飛び込んで活動しました。

これらの活動を含めて、来館者の県博への評価は、「立派な誇り得る文化施設が出来て、福井もやっと、一人前になった。今後、内容の充実をはかって欲しい。」というのが、アンケート調査結果、ほとんどでした。無論、二、三の改善点の指摘もありましたが。

ともあれ、わたしたちは、今後これらの地道な活動の積み重ねによって、内容の充実に一層つとめ、県民の誇り得る立派な博物館にしていきたいと思っています。そのため、来館者へのサービス精神と、それぞれの専門分野における専門家としての研鑽を忘れないことが根本であることを念頭において頑張りたいと思います。最後になりましたが、県民各位の今後一層のご支援・ご協力を心からお願い申し上げまして結びといたします。

東京国立博物館巡回展「日本の美」開催間近！

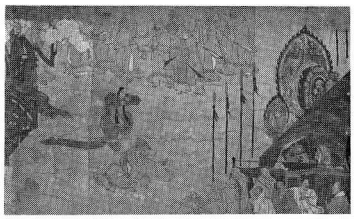
――日本美術の代表的名品を一堂に

東京国立博物館昭和六十年度巡回展が、本館との共催により、**7月24日(水)から9月1日(火)**の期間で催されます。巡回展はタイトルにあるように、縄文時代から江戸時代にいたるまでの東博所蔵の名品によって構成されるもので、今回は142件147点が展示される予定です。ここではその中のおもなものを若干紹介してみましょう。

まず縄文時代から弥生時代にかけての先史室からは、全国各地の縄文土器・弥生土器の優品をはじめとして、遠敷郡上中町堤出土の「袈裟襷文銅鐸」が出品されます。これは本館開館時に次いでの里帰りとなります。

古墳時代を中心とする原史室からは、特に松岡町二本松山古墳出土の冠が注目されます。本県で初めて公開されるものですが、その形が朝鮮半島の冠と類似しているといわれています。また群馬県太田市由良出土の埴輪は、盛装した男子の姿を表わすものの中でもよく整ったものの一つといわれています。

絵画室からは重要文化財の「天狗草子」、同じく重文の長谷川信春「伝名和長年像」をはじめ、越前松平家伝来の住吉具慶「徒然草画帖」など16点が出品されます。



書跡は聖武天皇筆と伝え「大聖武」とよびならされる「賢愚経断簡」をはじめとして、小野道風・藤原定家・一休宗純・本阿弥光悦・烏丸光広・良寛等らの書聖達の墨跡が展示されます。

彫刻は平安中期の帝釈天立像と鎌倉中期の阿弥陀如来立像の2体。さらに能面が4面。

金工室からは平安時代の八稜鏡や同じく羽黒鏡とよばれる、羽黒山出羽神社御手洗池から出土したことで有名な和鏡他重文3点を含む11点。

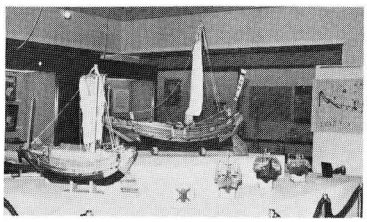
刀剣室からは鐔を中心にして17点。さらに染色室漆工室・陶器室からそれぞれ優品が出品されます。

このように極めて多彩かつ優れた品々が一堂に会するこの機会に、充分堪能していただきたいと思います。

特別展「北前船と越前・若狭」を終えて

4月21日より5月31日まで春季特別展として、「北前船と越前・若狭」を開催しました。本展では江戸中期より明治期にかけて活躍した「北前船」をテーマにとりあげ、北前船の全体像と越前・若狭との関わりを明らかにすることを目的としました。また、この特別展に関連し、日本海事史学会副会長の石井謙治氏を迎え、「北前船について」と題し、講演会も開催しました。今回の特別展には、県外からもかなりの観覧者があり、北前船に興味関心のある方が以外に多いのには驚きました。

本展には約160点あまりの展示資料を県内はもとより、北は北海道、南は香川県からと広く資料を集めましたが、未発表の資料もいくつか展示することができました。これを機会に、北前船に関する資料を調査していきたいと思っています。最後になりましたが、今回の特別展に貴重な資料を快く出品していただきました所蔵者ならびに御協力いただきました皆様に深く感謝いたします。



研究ノート

清永のデンガクから

—福井の婚姻習俗研究のための試み—

坂井町清永で調査をした時、ここでは婚礼に必ずデンガクを作るが、他地区では行なわれていないため「清永のデンガク」と呼ばれているという話を聞いた。婚姻に関する記述は市町村史にほぼ必ずあるが、このような慣習はまだ見ていない。そこでこのデンガクのことを紹介し、また清永の婚姻習俗を中心にして嶺北の婚姻について考えてみたい。なおここで婚姻とは配偶者を求める段階からすべての儀礼が完了するまでと、相互の家の関係までを問題にするときに使い、婚礼とは婚姻成立の儀礼とその直後の披露をさすことにする。

清永のデンガク　婚礼は葬儀とともに、個々の家で行なわれる儀式、ふるまいの中で最大の規模のものである。比較的新しい時期には仕出し屋から料理をとることで、かなり準備の作業は少なくなっただろうが、それでも親戚や近隣の助力を必要とした。従って婚礼に招かれる者は、同時に手伝う者でもあった。清永でも披露などは夜も遅くなってから始められたのであるが、婿方の招待を受けた人は午前中から婚家に集まって来る。女達は通常のふるまいの料理の準備やその他の仕事をする。ところが男達は土間や物置きに集まる。そこには莚やござが敷かれ、デンガクが始まる。

始まる、と書いたのは単に作るだけではないからである。ここのデンガクは現在はハタハタを使うが戦前はイワシを焼いて味噌を付けたものであった。男達は頭を切り落し、腹ワタを出す者、ヨグシに刺す者、炭火で焼く者と別れて次々とデンガクを作る。が、作るだけではない。というよりも作るはしから酒を飲みながら味噌を付けて食べてしまう。他地区から清永へ婿入りした人が親戚の婚礼に招かれ、手伝いのつもりででかけた。ところが仕事らしいことは何一つせず、デンガクを食べることが仕事と言われて面くらった、という話も聞いた。デンガクを作るのは男達だけであるが、食べるのは無論男だけではない。招かれた女達も食べたし、また披露の膳にも必ずいくつかはつけられた。しかし量の点から見ても男達の食べてしまう方が多く、また傍目にはとうてい婚礼の手伝いをしているとは見えないから、「清永のデンガク」ということばが生れたのであろう。結婚式場での婚礼が一般化した今日も、近隣や遠い親戚へのふるまいのためにまだデンガクを作っている家があり、廃止しようとの声もかなりあるという。

デンガクが披露の膳に必ずつけられたというのは、ごく簡素なものではあるが、婚礼に不可欠な料理と考えられていたことを表わしていよう。古い時代は貧しかったから婚礼にも安い魚を使い、惰性的に続いたまでと一蹴することもできる。しかし清永は婚礼の時をもって嫁が完全に婚家へ移るという方式よりも、やや古い婚姻方式が続いていた。古いタイプの婚姻方式では婚姻成立の儀礼が簡単なものになる傾向が認められる。とするとイワシのデンガクも貧しさを超え、古い婚姻方式の伝承を伝えている可能性もある。

シキマタギと倉、嫁の里帰り　福井近辺にはシキマタギということばがあり、披露宴を伴わない簡略な結婚という意味でやや軽蔑的に使われている。朝まで続くような披露宴が普通になれば、経済的その他の理由で披露を欠くものを一段低いものと思うのもなりゆきであろう。

シキマタギのことばは坂井郡各地にも伝えられている。ただし、福井近辺のような略式の婚姻成立という意味ではない。ことばは違うが和泉村のアシブミ（足踏み）の内容を見る。婚約が成立するとしばらくたって嫁は両親、仲人とともに婿方を訪ね、簡単な祝をする。嫁は一、二日婚家にとどまるがそのあと実家へ帰ってしまう。嫁が婚家に移り住むのは半年か1年先になる。この間、夫は嫁の実家へ通い嫁が妊娠することも珍しくない。また実家へ帰ったあと中京方面へ出稼ぎに行き、嫁入道具の費用のたしにした人もあったという。

本来のシキマタギは、このように、婚姻成立儀礼は婚家でするものの、嫁は実家にとどまり夫が通う婚姻方式と婚姻成立儀礼を示していた。坂井郡で聞かれるシキマタギもこの意味で使われているものがある。県内では具体的にシキマタギのふるまいまで記述した資料はないが、少なくとも大勢が集まり夜明けまで飲み続けるようなものではなかった。このような

ものであればイワシのデンガクが登場してもふしぎではない。

清永では婚礼後嫁が実家にとどまるような婚姻方式は既に聞けない。その代りに、1)婚家での新夫婦のへやとして倉が使われる。2)嫁は婚礼のあとおよそ1年はその半分を実家で過す。

倉の使用も福井近辺ではよく聞かれる。古い農家建築では新夫婦に独立した居室を与えることはできないから倉を使ったとも言える。ただ倉がなければこの習俗は存在し得ない。そして倉が普及するのはそう古いことではないから、比較的新しい習俗と言えよう。それにしても他地方では倉を新婚夫婦の居室にあてるという話はあまり聞かない。この地方では倉に財産の収納空間以上の意義を認めたのか、また倉に住む期間が世帯譲りまで続く例があるが、複数夫婦の同居を忌むような観念があったのか、いずれもまだわからない。

次に、嫁の里帰りであるが、若い嫁がたびたび実家へ里帰りする話はよく聞かれる。しかし清永の場合はたびたびではなく、5日とか7日などの一定周期で、嫁は婚家と実家の間を行き来した。周期は家によって違う。また周期を婚家と嫁の実家の間で約束しておくというものでもなかったが、慣習として認められていた。大正8年生まれの人は、農繁期はさすがに実家へ帰るのを遠慮したというが、明治28年生まれの人は農繁期でもそう遠慮しなかっただろうと言う。さらに明治半ば以前は霜月休みというものがあり、嫁はほぼ1ヵ月、通しで実家へ帰っていたらしい。嫁の里帰りの頻度が下ったとは言え、このような習わしが第2次大戦前後までは続いていたのである。

女の労働力が重要な意味を持つ所では、シキマタギや頻繁な里帰りが遅くまで続いたらしい。しかし清永では必ずしも実家の仕事をするために帰ったのではない。農閑期の霜月休みはそれをよく示している。また、嫁が実家へ帰る時は必ず自分の衣類を包んだ風呂敷包みを脇に抱え、実家ではその洗濯だったというし、妊娠後なら子供の衣類を作るのに忙しく、実家へ帰っても昼寝などとうていできなかったという。つまり、嫁の実家と婚家とが対等な関係に立ち、娘を嫁にやるが、その労働の半分は実家に留めるというものではなく、あくまでも婚家が優位の関係であった。嫁が婚家から実家へ帰るのは、一日の仕事が終った後、夕食の前だったのに対して、実家から婚家へ帰るのは、実家で朝食をとり仕事前に婚家へ着くようにした、というし、また婚家へ帰るときは、餅でもアラレでも何でも良いが必ずみやげを持って行く必要があった。これなども婚家の優位を示していると言える。北陸地方は嫁の実家が婚家に対して弱い立場に立つというが、清永のようなより古いタイプの婚姻方式でもその萌芽が見られる。

初婿入り　清永では嫁は新婚の1年のほぼ半分を実家で過すが、婿が嫁の実家へ行くことはなかった。半分にせよ嫁は婚家にもいるのだし、また婿が正式に嫁の実家を訪問するは婚礼後1年程も経ってからだった、という事情もあろう。

今日の結納は一般に婿が仲人、両親と一緒に嫁の実家へ行き手厚いもてなしを受けるものが多い。しかし、清永では昭和30年頃まで、結納にでかけるのはカミサマ（仲人）だけであって婿はもとより親も行かなかった。婚礼の当日嫁を迎えに行くこともなかった。さすがにこの時期になると、婚礼から3日め頃の里帰りのとき嫁と一緒に実家へでかけたらしいが、初婿入りが婚礼に先立つようになったのはせいぜいここ30年程のことである、と言える。初婿入りが婚礼より遅れる状況では、嫁入り道具は措くとしても、結納のふるまいを見て婚礼のふるまいを決める、といったことは起らないだろう。

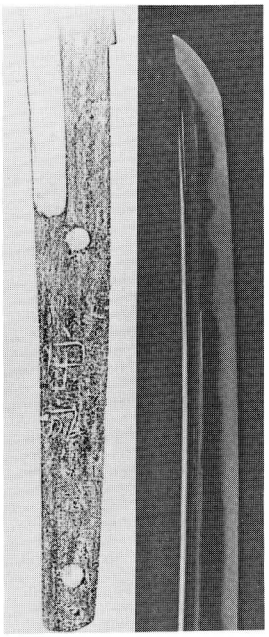
清永の婚姻習俗はデンガクを除くと特に珍しいというものではない。町の婚礼に比べればやや簡素とは言えようが標準的なものと言っても差支えないだろう。敢えて取り上げたのは婚姻習俗調査の問題点を整理したかったからである。

北陸地方の婚姻習俗は、大陸のそれとの関わりや、日本の文化の変遷を考える上で注目されている。同時にまた、他地方に比べて著しく派手な嫁入りじたくが話題になり、その改善が叫ばれる。いつから、どんな訳でこのように派手になったのか、これもまだわかっていない。これを解決するには一升水などの儀礼だけ、あるいはふるまいだけではなく両方をあわせて調べる必要がある。一つの問題提起として、紹介した次第である。

（坂本　育男）

収蔵資料の紹介

太刀（銘守弘）購入資料



刀長71.8cm、反り2.3cm。

鎬造り、庵棟、中鋒、茎は少々磨上げられているものの、踏張りがあって堂々たる体配である。目釘孔２、栗尻、鑢目浅い勝手下り。

鍛えは柾ごころの交じった板目に、地沸よくつき湯走りがかる。刃文は瓦の目に丁字交じりの小沸出来で、皆焼がかり、頻に砂流しかかる。帽子は浅く湾れ込んで掃きかける。彫物は表裏棒樋が茎で丸く止まる。

守弘は越前千代鶴国安の子といい、初代を応永と伝えているが、本資料は作風からやや時代が上がり、南北朝末期にかかると思われる。国安は山城の来国安の弟子ともいわれ、越前来などと呼ばれるが、その作品は希有であり、守弘に見る限りは地刃共によく沸え、柾がかる鍛えと華やかな刃文などすでに山城来の面影はない。

本資料は、地刃の冴えと品格を備えた優品であり、江戸時代の『光山押形』にも所載され、古刀期における越前物としては唯一の重要美術品に指定されている傑作である。（村野）

田の神祭の神輿　模造

小浜市池河内（表紙写真参照）

若狭の北川流域では田植終了後、子供組が神輿をまわす田の神祭がおよそ40の地区で行なわれてきた。池河内は松永川の上流にあり、稲作よりも炭焼などの林業の方が盛んであったが、ここでも田の神祭が行なわれてきた。

ここの田の神祭はいくつかの点で他地区と違った様相を示していたが、神輿も全体を麦わらで飾るという特異な物であった。すなわち、稲わらの芯を作りその周囲に葉を取り除いた麦わらを巻いて胴とし、屋根や鳳凰（現地では孔雀と言うが）、ツバメなども麦ワラで作る。これに神社の鈴の緒やアオイの花を飾りつけて彩を添える。

この神輿は毎年新しく作られてきたが、昭和38年頃から麦ワラの入手が困難になり作られなくなった。ただ、若狭歴史民俗資料館が中心になって実施した田の神祭の調査の結果、池河内と同様な麦ワラの神輿がいくつかあったことがわかり、また最も華麗な池田・検見坂の神輿は今も麦ワラの屋根を持つ。豪華な作りの神輿とは違った美しさがあるが、なぜ麦わらを使ったのかはわかっていない。（坂本）

郷土の人物シリーズ③

—鉱物学者　故市川新松先生—

《明治元年（1866年）～昭和16年（1941）》

武生市中新庄に「市川鉱物研究室」がある。この研究室は土蔵型の２階建で、大正４年に御大典記念として市川先生が私財を投じて建築されたものである。現在も同研究室には国内外の貴重な鉱物標本が保管されている。

故市川先生は独学で鉱物学に取り組まれ、海外の研究者にも名を知られた当時の我国鉱物学の第一人者の一人であった。市川先生は小学校代用教員から独学で師範学校の教員まで勤められたが、鉱物学の研究に専念されるため職を辞し、郷里武生市の地で研究に没頭された。その後の先生の研究生活は徹頭徹尾努力奮闘の連続で先生の著書「奮闘五十四年」の中で『研究に没頭し未だ一回も花鳥風月の遊びを試みたる事なく又一日も無為徒然として日を送ったこともない。時計の針の絶え間なき秒音を警報として一分一秒の間も奮闘に奮闘を重ねて新智識の開拓に全力を注いだ。』と述べられている。

このような先生の奮闘の成果は数多くの論文として発表された。この中で特に日本産水晶の蝕像の論文はアメリカ理学雑誌に発表され海外の研究者から評価を受けられ、多くの外国研究者と交流を重ねられた。また、鉱物標本の交換も海外とされその標本は今も市川鉱物研究室に保管されている。

現在、同研究室は御子息市川渡金沢大学名誉教授によって受け継がれ整備充実されている。（東　洋一）

博物館友の会 役員決まる！

昨年来募集を続けてきた博物館友の会会員も200人を超え(6月現在)、今年度から独自の活動を開始しています。そこで、去る3月24日に開かれた第1回の友の会総会での決定事項から、役員、60年度活動計画などを報告します。新役員の皆さんにはそれぞれお忙しい仕事をお持ちの中、献身的なお世話をしていただくわけですが、館職員を含め皆で力を合わせて活発な会活動を進めていけるよう頑張っていただきたいと思います。役員は次のとおりです。

会　長	品川　一郎	
副会長	三上　一夫	
運営委員	上田雅子	藤本良致
	清水範夫	松井政信
	田村達映	松山幸弘
	田谷芳江	増田美佐子
監　事	斎藤　優	牧野　進

(敬称略)

次に総会では、今年度の活動計画案が決められ、それを受けて4月には運営委員会が開かれて、日程・内容など具体的に協議されました。現在予定されている計画は次のとおりです。(未定を含む)

1. 展示説明会(常設展)
   1) 自然～考古　6月8日
   2) 古代～仏教　7月6日
   3) 中世～近代　7月28日
   4) 民俗Ⅰ　11月
   5) 民俗Ⅱ～産業　3月
2. 展示説明会(特別展)
   1) 北前船と越前・若狭　5月11日
   2) 日本の美　7月21日
   3) 埋蔵文化財　10月13日
   4) 館蔵品　・2月22日
3. 学習会
   1) 未　定　11月
   2) 未　定　3月
4. 見学会
   国立民族学博物館(大阪)(予定)　10月6日
5. 博物館オリエンテーリング
   1) 小学校高学年生対象　8月
   2) 中学生対象　1月
6. 友の会「会報」の発行
   (第1号)　6月
   (第2号)　12月
7. 印刷物、模型等の製作、販売
   1) はくぶつかんミニガイド
   2) 絵はがき(10枚)

入会の申し込みは博物館学芸課までお問い合わせください。

ビデオライブラリーから

鯖　街　道

若狭小浜と京を結ぶ道は、鯖の来る道「鯖街道」と呼ばれ、京の人々に親しまれてきました。捕れだちの鯖に塩を一ふり、かごをかついで一昼夜。今なお話に残る「鯖街道」は、数本の陸路の他に小浜から東へ進んで今津に至り、琵琶湖を南下して京に向かう道などが利用されましたが、この番組では、保坂から南に折れてまっすぐに南下し、三千院で知られる大原を経て京に入る陸路にスポットをあてました。また、滋賀県への県境近くにある熊川は、中継の宿場町として非常に栄えた町です。今なお当時の面影を偲ぶことのできる街並みなどから、人と人が行き交う街道や旅人、商人でにぎわう宿場を頭に描いてみてください。

白山への祈り

福井県内には白山神社や泰澄大師開基と伝える寺院が多く存在します。さらに泰澄大師にまつわる伝説も今なお語り伝えられています。このように福井の人々になじみ深い泰澄大師とはどのような人だったのでしょう。また泰澄大師の開いたという白山への信仰の跡はたどることができるのでしょうか。

このビデオでは県内に残る白山信仰の遺品を中心に、あわせて泰澄大師ゆかりの地も紹介するものです。とくに朝日町大谷寺に残る文化財の数々の映像はそれらが、秘仏とされるものもあるだけに貴重な映像といえるでしょうし、またそれを現在でも支えている人々の信仰心には頭が垂れる思いもします。さらにはそれらの信仰心の源であったはずの白山の清涼なる美しさの数々も、カメラはとらえます。泰澄大師への瞳景を含めた白山への祈りは、人間生活が大自然の中で営まれる限り、断えることなく続くような思いがします。

ふるさとの歴史と文化を学ぶ

県立博物館 夏・秋の行事

◆特別展 日本の美 ー縄文から江戸時代までー	7月24日(火)～ 9月1日(日)	東京国立博物館所蔵の日本を代表する美術資料約130点で構成。日本美術の流れとその美しさを求めます。東京国立博物館と共催。	
◆特別展 遺跡はかたる ーここ20年の 発掘成果からー	10月8日(火)～ 11月17日(月)	昭和40年代から盛んに発掘調査が行なわれ、多数の資料が得られた。これらの中から重要な資料を全県下から集め、原始・古代の越前若狭の姿を描き出します。	
◆講演会 日本美術のながれ 慶応義塾大学教授 西川新次先生	8月4日(日)	都に近い若狭、白山を擁する越前、県内に数多く伝えられている仏像は日本美術史の中で、どのように位置づけられるのか。日本彫刻史の立場から越前若狭の仏像をみなおします。	無料 対象…高校生以上 参加申込が必要です
◆講演会 越前の古代史 奈良大学教授 水野正好先生	11月3日(日)	越前は、弥生時代に銅鐸配布の中心地であり、古墳時代は首長が大和王権と密接なつながりを持つ地域でした。大和から照写した越前の特異性を語ります。	無料 対象…高校生以上 参加申込が必要です
◆自然教室 大地のおいたち	7月28日(日) 8月3日(土) 8月10日(土) 8月11日(日)	福井県の古生代と中生代（敦賀高校　木戸　聡） 福井県の新生代（博物館　東） 福井県の化石（博物館　東） 野外観察会　―化石・岩石採集をします―（博物館　東）	無料 対象…中学生以上 参加申込が必要です 観察会　保険料100円程度
◆美術史教室 福井の美術	8月18日(日) 8月25日(日) 9月1日(日) 9月8日(日)	越前の仏教美術1（博物館　長坂） 越前の仏教美術2（博物館　長坂） 仏教美術と工芸品（大野市文化財保護委員　岩井孝樹） 若狭の仏教美術（小浜市文化課　杉本泰俊）	無料 対象…高校生以上 参加申込が必要です
◆歴史教室	11月2日(土) 11月9日(土) 11月10日(日) 11月16日(土)	朝倉義景の領国支配（博物館　清田） 柴田勝家の領民支配（博物館　山形） 見学会（朝倉氏遺跡他） 結城秀康・越前入国（博物館　村野）	対象…高校生以上 参加申込みが必要です 保険料　100円程度
◆学習会 拓本をとろう　ー野外編ー	9月22日(日)	歌碑や石仏から美しい拓本を取る技術を用具づくりとともに学びます。	材料費　約1,500円 対象…中学生以上 参加申込が必要です
◆学習会 しめ縄を作ろう	12月8日(日)	しめ縄の作り方を習い、正月の意味を学びます。	材料費　300円程度 対象…小学校高学年と父兄 参加申込が必要です
◆野鳥観察会	10月27日(日)	北潟湖大堤に飛来する冬の渡り鳥を観察していただきます。 （指導…県文化財保護審議会委員　八田七郎右衛門氏）	保険料　100円程度 対象…小・中学生と父兄 参加申込が必要です
◆自由研究相談会	7月21日(日)	夏休みの歴史や地理の自由研究について，ヒントを与えます。	無料 対象…小学校高学年，中学生 参加申込が必要です
◆標本の作り方指導会	7月25日(木) 7月26日(金) 7月27日(土)	標本の採集の仕方と、正しい整理の仕方を指導します。1回目岩石・化石、2回目植物、3回目昆虫、1回だけでの参加もできます。	無料 対象…小学校高学年，中学生 参加申込が必要です
◆映画会	8月11日(日)	「風俗画」「絵巻」「水墨画」 東京国立博物館の企画による映画です。日本の古代、中世、近世の三つの時代の中心となる世界をとりあげて、各時代の美意識を求めます。	無料 対象…入館者
◆映画会	9月29日(日)	自然関係（内容未定）	無料 対象…入館者
◆映画会	10月20日(日)	考古関係（内容未定）	無料 対象…入館者

※詳細は約1ヵ月前に新聞などでお知らせします。日時，内容の一部が変わることがあります。
※お問い合わせ、参加の申込は博物館学芸課へお願いします。

〈刊行物の御案内〉

博物館及び友の会では、次のような刊行物を出しています。いずれも、受付にてお求め下さい。

- 「常設展示」図録　¥2,000(〒300)
- 「北前船と越前若狭展」図録　¥1,000(〒250)
- 開館記念「福井の文化財展」図録　¥2,000(〒250)
- 「はくぶつかんミニガイド」　¥100
- 絵はがき　1枚¥50，セット(10枚)¥500

資料収集に御協力下さい

ふくいミュージアム　No.8　1985.7.1
編集　福井県立博物館
発行　福井市大宮2丁目19－15
〒910
☎ 0776－22－4675(代)
印刷　出口印刷株式会社